

和紙が作り出す
幻想の世界ひおき^{ゆめおり}夢折工房代表・前田孝子 さん
Takako Maeta

和紙特有の「防割」を活かして、温かみのある作品を作ります

和紙のある暮らしの中で

「立体ちぎり絵」をご存じですか？紙を使って絵を描くのがちぎり絵ですが、それを立体で表現するのがです。

青谷町の日置地区で活動する「ひおき夢折工房」は、地域特産の因州和紙を使い、その風合いを活かして花を中心とした創作を行っています。

立体ちぎり絵を考案したのは、代表の前田孝子さん。新しい作品の創作や、立体ちぎり絵教室を開いて、工房のメンバー15人を引っ張ります。

実は、ひおき夢折工房は、「折

る」の字が表すとおり、元々は折り紙のサークルでした。

市街地に住んでいた前田さんは、結婚を機に青谷町で暮らし始め、生活の中に和紙がいつもあることにびっくりしました。便せんや封筒はすべて和紙、天ぶらを揚げる際に油を切る紙も、近所の紙屋さんで出た損紙（製品にならない紙）。「なんてぜいたくなだろう」と思いました。この和紙を使って何かできないかと思つて」と前田さんは当時を振り返ります。

まず取り組んだのが、折り紙。地域の人たちと折り紙の

サークルを立ち上げ、色で染めた和紙でくす玉や箱を折っていました。

和紙にしかできないことを

そのうちに、ある人から「和紙にしかできないものを作ってみたら？」とアドバイスももらいました。

考えに考えた前田さんは、和紙特有の、ちぎった時にできる「けば」を活かして、大好きな花を作ることを思い立ちました。テッセンの花を作つてその人に持つていくと、「これだで。こういうものを作れば誰にも負けん」と太鼓判を

押し、「立体ちぎり絵」という呼び方も、その人とその場で考案したのです。

それ以来、草花を中心に和紙を使った立体ちぎり絵を制作し始めました。テッセン、スイセン、コチヨウランなど、さまざまな花にチャレンジしています。和紙で作るのに向いた花とそうでないのがあるのだとか。

草花のほかに取り組んだのが、フクロウ。松ぼっくりを胴体にして和紙でくるんで作った愛らしい表情のフクロウの「ふうちゃん」は、平成14年の第44回鳥取県発明くふ

佐治天文台長

こうさいひろき
香西洋樹の「望遠鏡って何だろう」

Vol.30 星の光が目突き刺さる

「望遠鏡って何だろう」のシリーズも、今回で最終回となります。これまで望遠鏡や双眼鏡についてお話ししてきましたが、望遠鏡や双眼鏡とは何なのか、改めて考えてみることにしましょう。

眼鏡をお使いの人は、眼鏡を作る時どのようにされるでしょうか？まず眼科医の診察を受け、処方箋をもらいます。この処方箋を持って眼鏡店に行き、目に合ったレンズを求めて、お気に入りの枠にはめてもらいます。こうして、自分に目に最も良い眼鏡ができますね。

では、良い望遠鏡とはどういったものでしょう？それは、目の能力を上回るものではないかと思えます。

ドイツにカール・ツァイスという有名な光学会社がありますが、この会社が作った天体望遠鏡で星を見て、視神経が痛く感じたことがありました。また、1965年頃、東京大学東京天文台の観測所が埼玉県に完成し、そこに在職していた私は観測機器の整備やテストを行っていましたが、主望遠鏡に付けられた15インチ案内用望遠鏡をのぞいていた時に、多くの星たちが瞬きもせずジッと静止しているように見え、さらにしばらく見ていると、なんだか目の中が痛くなってきたように感じました。目の接眼部から離してみると何ともありません。不思議に思って、何度も繰り返すのですが同じ状態が繰り返されるばかりです。

星の像は、それこそ針の先ほど鋭いのです。何度も同じことを繰り返すうちに、星から光が網膜の視神経をたたくので、痛く感じるのだと知ったのです。

これ以来、光学系は目の能力を下回るようではだめ、目と同等以上のものでないといけな、と考えるようになりました。

目に痛いような星の像を作るのが本当の望遠鏡なのです。

※「見上げてごらん」の連載は、今回で終了します。ご愛読ありがとうございました。

StarWorld
見上げてごらん



作品を見た瞬間に引き込まれ、たくさんの人が教室に参加したり、ワークショップで体験したりします

教室の要望が引きも切らず

作品の制作と並行して、立ちぎり絵教室も始めまし

う展の鳥取県商工会連合会会長賞を受賞しました。

それをきっかけに、前田さんは勤めを辞め、立ちぎり絵制作に打ち込むことに。

現在、ひおき夢折工房では、このフクロウの花などを制作し、あおや和紙工房などで販売しています。

た。最初の教室は、同じ因州和紙の産地の佐治。その後、青谷でも開催し、今では岩美町、大山町、米子市など、県内あまねく回り、15の教室で約200人を指導しています。

「お教えするのは私よりもずっと上の年齢の人が多くいます。立体ちぎり絵では私が先生ですが、それ以外はみんなが私の先生なんですよ。いろんな情報を教えていただきます。そうやってつながる人脈こそが財産ですね」と前田さんは顔をほころばせます。また、器用なのは日本人だけかと思ったら、こんなこと

も。「アメリカの人が教室に参加したんですが、手さばきがとても合理的なんです。さつとちぎってけば立たせなくていい」と前田さん。

立体ちぎり絵は世界に

前田さんには2つの夢があります。1つは作品のこと。「白い紙で、真っ白な花ばかり作ってみたいんです」と前田さん。どこの紙屋にも白い紙はありませんが、その白さはそれぞれ。そんな色の違いも意識できるような作品を仕上げたいとのこと。また、白い花を見て、それぞれが好きな花の色をイ

メージしてもらえればとも。もう1つは、世界への発信。「3月にロシアのウラジオストクに行き、因州和紙のPRを兼ねて立体ちぎり絵の体験をしていただく予定です。そうやって立体ちぎり絵が国外に広まれば、日本中に広まるのも早いかもしれません」と前田さん。

鳥取から立体ちぎり絵とともに世界に羽ばたこうとしているひおき夢折工房。独特の風合いが温かみをもたらし、因州和紙で、これからも夢を折り続けていけることでしょう。